

冬能登

烈風が吹きすさび波の華（はな）が舞う冬能登は日本列島の冬最前線に位置している。ゆるやかな弓状を描いて日本海の南縁を縁取る海岸線に、左手の親指を折り曲げたように突き出しているのが能登半島である。シベリヤ大陸から季節風が最初に触れる能登の輪島は列島に襲来する大雪を捕らえる触覚の役割をしている。

シベリヤ寒波の襲来を告げるニュースで、いつも登場するのが、輪島上空に氷点下三五℃以下の猛烈な寒気団が襲来し、日本海側の地方では大雪の恐れ：：』という表現である。早とちりの人が実際に輪島の街の気温が氷点下何十度となるのでは勘違いして、「どんな防寒服を着て行ったらいいのでしょうか」と観光協会に真顔で問い合わせて来るそうだ。

正確には輪島上空およそ『付近の気温が氷点下何度というもので、富士山より高いところの話で、地上の気温は暖流の影響でせいぜい氷点下数度くらいのものである。誤解ともかく5℃上空で氷点下三五℃という気温は、暖かい海と上空寒気との間にできる雪雲がよく発達する条件

の一つで、北陸地方の大雪のよい目安となっている。

なぜ輪島が登場するかというと、この街に高層気象観測を行う測候所があるからである。札幌・秋田・輪島・米子と展開されている観測網のなかで、大雪を捕らえる最前線基地として、絶好な位置に輪島がある。水素ガスを一杯に詰め込んだ直径一メートルほどの気球に観測器械をつないで飛ばし、上空の風や気温、気圧、湿度を一日二回の観測が行われている。

烈風のなかでの飛揚は大変な作業である。風に翻弄されながら生き物のように、のた打ちまわる白いゴム気球、その根もとを握ってなだめすかすように放球地点まで運ぶ観測員の足元も風に煽られ千鳥足となる。気球が風に引っぱ張られたタイミングで、揚がってくれ」と念じながら気球を放す。

一瞬の後に気球はかすかに上昇しながら地面を這うように吹雪が舞う視界から消えてゆく。レーダーで追尾された観測器からのリズミカルに流れる気温、気圧、湿度：：と刻み込まれていく信号音を聞いてほっとする観測員。毎分四〇〇回で上昇、大雪

最前線の冬能登から大雪を探る触覚が、白い気球とともに上空深く秘かに伸びていくようである。

（村松 照男）

